

奄美市名瀬における都市整備が地域信仰に及ぼす影響に関する研究  
 —大熊、有屋地区を対象として—  
 Study on the Impact of Urban Development on Local Promotion in Naze, Amami  
 —Focus on Daikuma and Ariya district—

○小池真琴<sup>1</sup>, 押田佳子<sup>2</sup>

\*Makoto Koike<sup>1</sup>, Keiko Oshida<sup>2</sup>

Abstract: In this paper, we clarified that the cause of the lost in ritual spaces led to lack of consideration for Noro ritual in the Heisei urban development.

1. 背景及び目的—奄美群島は、沖縄と鹿児島とのほぼ中間に立地することより、長い歴史の中で大和文化と琉球文化双方の影響を受けて成立してきた。奄美大島において、島民による統治が行われたのは中世頃までと考えられており、以降は平家武将、琉球王国、薩摩藩の支配下に置かれた後、一旦、鹿児島県に併合されたものの、第二次世界大戦敗戦に伴い、米国民政府の統治下に置かれるなど、800年以上の長きに亘り、様々な文化が混在する場であった。特に島の文化に大きな影響を与えたのが、琉球王朝統治期における「ノロ制度」の導入である。女性神役「ノロ(祝女)」は、琉球最後の王朝である第二尚氏王統期第三代尚真王の治世に確立した中央集権制の下、「辞令書」で任命された宗教的権威者である。この制度は、慶長 14(1609)年に薩摩藩の法令によって琉球王府からの辞令書授受を禁じられて以降、徐々に衰退したが、一部の集落では精神的支柱としてのノロは粛々と継承され、その後、集落ごとに独自の変容を遂げることとなった。

近代以降は、ノロの高齢化や後継者不足によってノロ不在となる集落が相次いだ。現在、奄美大島におけるノロは消滅寸前となり、ノロ祭祀文化の保全や継承の在り方が問われている状況にある。

先行研究では、ノロ不在後にノロ祭祀が地域の行事と化したり、祭祀空間であるカミヤマやカミミチなどが失われる中で、公共空間的な役割を果たすミヤー

と呼ばれる広場のみが継承されるなど、ノロ祭祀そのものが公共化する傾向を捉えた<sup>[1]</sup>。また、その中で都市整備の介入がノロ祭祀の変容に大きく影響することにも触れられているが、そこに至るまでのプロセスについては明らかにされていない。

そこで本稿では、ノロが存在した時期に都市整備を行った奄美市名瀬大熊、有屋の 2 地区を対象とし、都市整備がノロ祭祀の継承に及ぼす影響を把握することを目的とする。

2. 奄美大島におけるノロ祭祀と祭祀空間構造—慶応 4(1868)年発布の「太政官布告(通称：神仏分離令)」によりノロ祭祀が禁止されたが、奄美大島では豊漁祈念のために、近年まで一部の集落における残存が確認されている。Table1 より、ノロ祭祀にはノロが神を迎え祀るための聖地として祭祀空間が必要であり、集落毎の差異は認められるものの「カミヤマ」「カミミチ」「ミヤー」「トネヤ」の 4 つが挙げられる。

3. 研究方法—本研究の研究方法を Table2 に示す。

4. 都市整備がノロ祭祀の継承に及ぼす影響—大熊、有屋両地区における都市整備の概要を Figure1 に示す。

4-1. 大熊地区—Figure1 より、大熊における都市整備は、昭和期の集落整備と平成期の都市計画の 2 つがある。以降、それぞれの事項について述べる。

(1) 集落整備期(昭和 8(1933)~13(1938)年)—大熊地区では、昭和 8(1933)年に鹿児島県から衛生模範部落の指定を受けたことを契機に、青少年(のちの青年団)を主体とした集落整備が行われた。具体的には、大川の河道変更などの 5 事業すべてが昭和 13(1938)年

Table1 Ritual places by Noro (ノロ祭祀空間) (This is original table by authors)

祭祀空間	概要	概要図
①カミヤマ	神が去来する最も主要な聖地となる山。	
②カミミチ	カミヤマに降臨した神が山から集落に降臨する際に通る道。神聖な道である。	
③トネヤ	一般民家と同様の建築様式である「祭場」であり、トネヤの神という集落の神が祀られる。	
④ミヤー	集落の中心にある広場。内に土俵を設け、神に捧げるための相撲をとる。	

Table2 Outline of the survey (調査概要) (This is original table by authors)

方法	文献調査	ヒアリング調査	対象地位置
期間	2017年10月1日~ 2018年8月31日	2013年11月22日, 2018年3月16日~18日	
対象	大熊史 <sup>[2]</sup> , 奄美大島名瀬市大熊集落遺跡群 <sup>[3]</sup> など	大熊地区在住 T N 氏, 奄美市役所職員 T 氏, 有屋地区在住 N 氏	
内容	奄美市名瀬大熊、有屋の都市整備及びノロ祭祀について		

1 : 日大理工・学部・まち、2 : 日大理工・教員・まち

までのわずか 5 年間で完了した。この際、集落単位でノロ祭祀を行うためのミャーと土俵、これに併設する公民館が集落の中心に据えられたことより、ノロ祭祀の重要性を踏まえた上で整備を行ったことがうかがえる。なお、ノロの弟である TN 氏<sup>※1</sup>によると、この頃はすでに、カミヤマ、カミミチの所在が不明となっていたことを確認している。

(2) 大熊土地区画整理事業期(平成 8(1996)~25(2013)年)—戦後、人口が増加傾向にあった大熊地区では、住民からの強い要請を受け、平成 8(1996)年より、都市計画道路並びに土地区画整理事業を行うこととなった。この時、都市計画道路の設置に伴い、ノロの住居を兼ねた祭場であるトネヤの移転を実施した。なお、ノロは現在、不在であり、区長がノロの代わりに祭祀を務めている。

4-2. 有屋・輪内土地区画整理事業期(昭和 54(1979)~平成 15(2003)年)—大熊同様、人口が増加傾向にあった有屋地区では、当時のノロ U 氏の夫である区長が積極的に市に働きかけたことによって、土地区画整理事業が実現した。この事業では、元ある家をもそのまま引いて移動する引き家という手法が用いられ、この整備に伴い、水路網が大きく改変された。これにより、水源地であるカミヤマ並びに水路とともにあったカミミチの記憶は若年者には継承されずに、現在に至っている。また、トネヤは住居部と祭祀部を切り離す

形で移動され、その後、ノロ U 氏が高齢化による廃業に伴い、隣接地区に移転したことにより、現在はトネヤのみが集落で保全・管理する共用地となっている。

5. まとめ—以上より、大熊地区の集落整備期に見られるように、昭和期にはノロ祭祀を遂行することを念頭に整備が行われたのに対し、平成期の両地区における土地区画整理事業においては、トネヤを残す以上の配慮がなされていないことを把握した。特に有屋地区では、ノロの身内が積極的に事業を進めたことが示すように、地域全体で整備を優先し、祭祀空間の継承が途絶したことが伺える。その結果、公共地として使えるミャーや個人所有であるトネヤは残せるが、精神的拠り所であるカミヤマやカミミチは廃れてしまうことが捉えられた。現在、両地区ともノロは不在であるため、残されたトネヤについても有屋のように、共用化による地域保全をしない限り、消失する可能性が高いといえよう。

### 6. 謝辞

現地調査を行うにあたり、地域のノロ関係者の方々には大変お世話になりました。ここに謝意を表します。本研究は平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究 C「地域再生に資する拠り所としての伝統的な祭祀空間のマネジメントに関する研究」(代表:上甫木昭春)の一部を使用しました。

### 7. 補注・参考文献

【補注】

※1 ノロの弟 TN 氏:大熊最後のノロの弟であり、トネヤの現在の管理者

【参考文献】

[1] 押田住子他,「奄美大島におけるノロ祭祀空間の継承状況に関する研究」[2] 名瀬市大熊壮年団,「大熊史」,大熊誌,1964.3.25[3] 名瀬市教育委員会,「奄美大島名瀬市大熊集落遺跡群」,2004.3.1

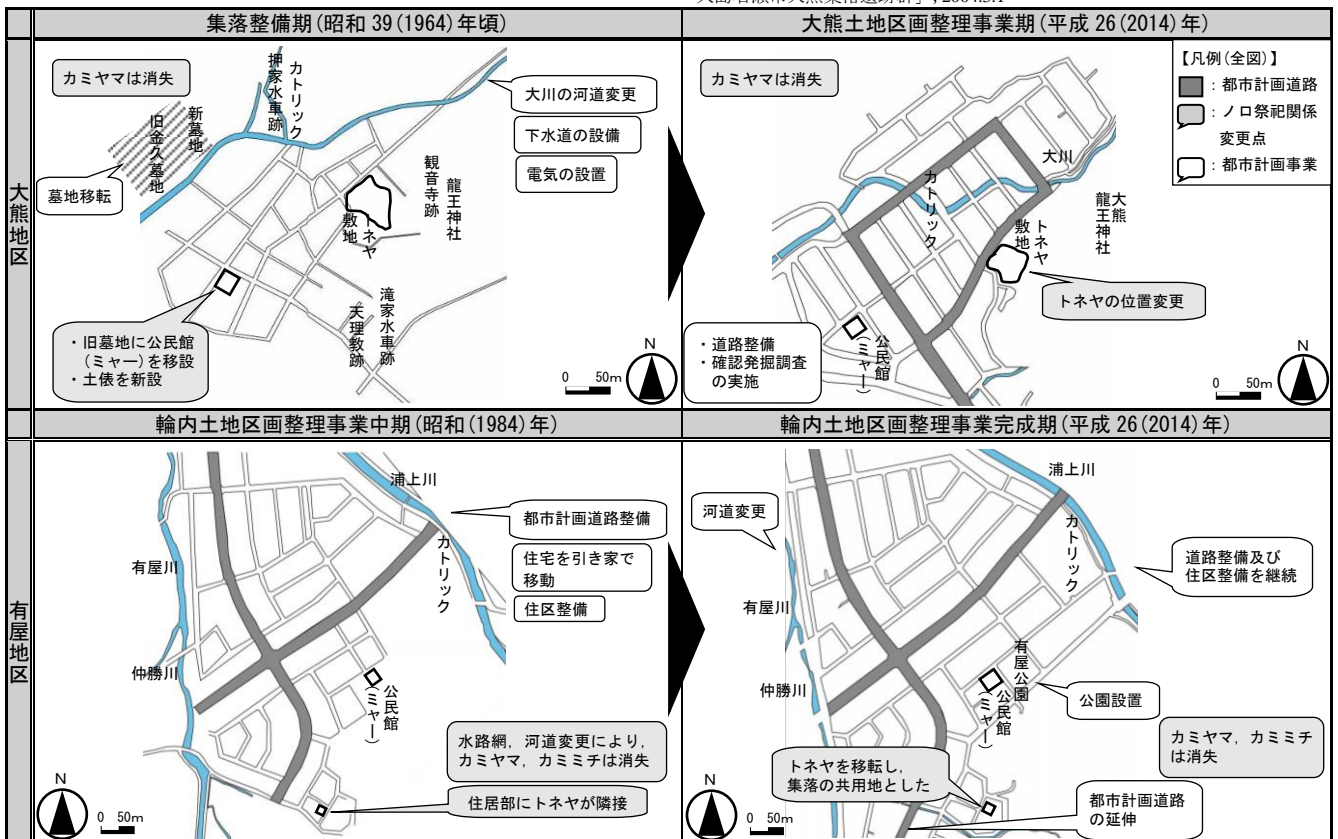


Figure1 Overview of urban planning (都市計画の概要)